

英語を学ぶことの意味を考える

大阪樟蔭女子大学 児童学部教授 菅 正隆

はじめに

学生時代に一度は、「なぜ、英語を勉強しなければならないのですか」と先生に尋ねたことがあるかもしれません。また、時には、「英語ができなくても生きていける」などと啖呵をきったこともあるかもしれません。この質問に対して、先生は、「英語はこれからますます使われるようになるから」「将来、海外に行くときに役に立つから」などと、場当たりの答えを言って説得しようとしたかもしれません。しかし、これでは、誰も納得しません。では、本当に英語を学ぶ意味とは何でしょう。今一度考えてみたいと思います。その前に、英語とは一体どのようなものなのでしょうか。

1. 英語とはどのような言葉なのか

(1) 英語の起源

英語の起源は、イギリスだと思っている人が多いようですが、それは一部間違っています。英語の起源は、今のドイツ北部に住んでいたゲルマン民族の一派であるアングロ・サクソン人が使用していた言語に由来しており、5世紀になって、彼らがグレートブリテン島（イギリスの島）へ侵入、占領を繰り返して、イギリス土着の言語と相まって古英語（英語のはじまり）が成立するのです。この頃の英語には多くのドイツ語が取り入れられ、EnglishがEnglisc（アングル族の）に由来することからも分かります。また、8世紀頃には、漫画「ワンピース」でも有名なヴァイキングがグレートブリテン島に侵入、定住したことにより、彼らが使用していた古ノルド語（スウェーデン、ノルウェー、デンマークなどの北欧で使用されていた言葉）が英語に影響を与え、さらには、11世紀（1066年）、フランス北西部に住んでいたノルマン人が英国を征服し、その時に、多くのフランス語が英語に取り入れられています。

(2) 英語は外来語から成り立つ

このような歴史をたどってきた言語なので、英語の実に80%は他の言語か

らの流用（外来語）だと言われています。つまり、英語は様々な言語の寄せ集めであると言っても過言ではないでしょう。その外来語の内でも、最も影響を受けているのはフランス語です。実に外来語の40%がフランス語とも言われています。例えば、rouge（ルーージュ：口紅）、menu（メニュー）、castle（城）、debut（デビュー）、salad（サラダ）などがフランス語を起源としており、他に、piano（ピアノ）、pizza（ピザ）、parasol（パラソル）などはイタリア語、school（学校）、grammar（文法）、history（歴史）はギリシャ語、guitar（ギター）、cockroach（ゴキブリ）はスペイン語、allergy（アレルギー）、theme（テーマ）、waltz（ワルツ）はドイツ語で、もちろん、日本語が起源のものもたくさんあり、futon（布団）、kimono（着物）、sushi（寿司）、karaoke（カラオケ）などは代表的なものです。

また、文字はアルファベットを用いますが、このアルファベットの呼び名は、ギリシャ語の最初の2文字 α （アルファ）と β （ベータ）を組み合わせて呼ばれるものです。

(3) アメリカ英語とイギリス英語

日本の学校で学ぶ英語は、アメリカ英語が中心となっています。これは隣国である韓国でも同様にアメリカ英語が中心です。しかし、他のアジアの国々やアフリカの国々ではイギリス英語が支流です。これは、政治的な関係が大きく影響していると言えます。

この二つの英語の違いは、例えば、「秋」を意味する単語は、アメリカ英語ではfallなのに対して、イギリス英語ではautumnと言います。乗り物の「バス」もアメリカ英語ではbusですが、イギリス英語ではcoachと呼ばれます。また、単語のつづりが異なる場合もあります。「色」を意味する語では、アメリカ英語ではcolor、イギリス英語ではcolourです。「劇場」はアメリカ英語ではtheaterなのに対し、イギリス英語ではtheatreとなります。加えて、発音が異なるものもあります。このように2つの英語に分かれたのは、1620年12月にメイフラワー号でアメリカに上陸した101人のイギリスの移民の言葉がアメリカ英語の起源になって、時代や様々な環境から独自に発展していき、イギリス英語とは異なるものとなっていったのです。

(4) 様々な英語

全世界には約 70 億人が暮らしています。その人たちが、5000 とも 6000 とも言われて言語を使って、日々の生活を営んでいます。その言語の中でも、母語（生まれながらにして使用している言語）人口が最も多いのは中国語で、約 8 億 9000 万人います。2 番目に多いのが英語で、約 4 億人程度です。ここには、イギリス英語、アメリカ英語はもとより、オーストラリア英語、ニュージーランド英語、カナダ英語、南アフリカの英語などが入ります。以下の表は世界の母語人口を表した表です。これを見ると中国語が一番多く、英語より中国語を学ぶ方が得なようにも見えます。

表 1 世界の母語人口（単位：100 万人） The penguin FACTFINDER (2005)

順	母語人口	順	母語人口
1	中国語 (885)	6	ポルトガル語 (175)
2	英語 (400)	7	ロシア語 (170)
3	スペイン語 (332)	8	ベンガル語 (168)
4	ヒンディー語 (236)	9	日本語 (125)
5	アラビア語 (200)	10	ドイツ語 (100)

次に、世界では、実際にどのような言語を使いながら日々の生活を送っているのかを見ていきます。下の表をご覧ください。ここでも、中国語を使用している人口は 10 億人強おり、英語の 5 億人の約 2 倍です。ここでも中国語が有利に見えます。

表 2 世界の言語別使用人口（単位：100 万人）

順	母語人口	順	母語人口
1	中国語 (1075)	6	アラビア語 (256)
2	英語 (514)	7	ベンガル語 (215)
3	ヒンディー語 (496)	8	ポルトガル語 (194)
4	スペイン語 (425)	9	マレー語 (176)
5	ロシア語 (275)	10	フランス語 (129)

次に、表 3 をご覧ください。これは、英語を公用語・準公用語としている国とその人口を示したものです。一方、中国語を公用語としている国は中華

人民共和国と中華民国だけに限られ、汎用性という意味では、狭い範囲での使用に限定されます。

表3 英語を公用語・準公用語等とする国とその人口

英語を公用語・準公用語等とする国	人口
54か国	2,107,312,000

これらからも分かるように、英語を公用語・準公用語とする国は中国語をはるかに超え、人口も2倍以上に跳ね上がります。したがって、英語は世界で一番使用され、世界で最もコミュニケーションに使用できる言語であるとも言えるのです。

(5) 情報の手段としての英語、そして

情報化が進んだ社会においては、英語はますます、使用価値の高いものとなりつつあります。例えば、インターネットの情報の約80%は英語で書かれ、世界の全科学論文の3分の2は英語で発表されています。また、世界中の全郵便物の約70%は英語で書かれ、英語の宛名が書かれています。ますます、英語が便利なアイテムになりつつあることは否定できないことでしょう。しかし、英語がすべてであるという考え、「英語至上主義」には異を唱えなければなりません。日本語も立派な言語ですし、それぞれ生まれ持った母語は、その国々の文化も歴史も背負ったものです。母語を軽視することは、自文化を否定することにもつながります。この点を考慮しながら、英語は決して一つではなく、多様性を持った言語で、それぞれの地域の文化や歴史をも含んで、それぞれの地域で英語を育てていこうという考え方 (World Englishes) が生まれてきています。日本語的な発音も、完全に否定されるべきものではないのです。それほど、英語が寛容な言語に生まれ変わろうとしているのです。

2. 英語を学ぶ意味

(1) ことばの幅を広げる (知性を磨くため)

私が前職である文部科学省教科調査官時代に、小学校に「外国語活動」を導入するにあたって、以下の文を中央教育審議会 (日本の教育の方向性を審

議する会議)に提出したことがあります。

(以下抜粋)小学生段階では、小学生のもつ柔軟な適応力を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うため、中学校段階の文法等の英語教育を前倒しするのではなく、国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることを目標として、外国語活動を行うことが適当と考えられる。(中略)なお、日本語とは異なる英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることは、言葉の大切さや豊かさ等に気付かせたり、言語に対する関心を高め、これを尊重する態度を身に付けさせることにつながるものであり、国語に関する能力の向上にも資するものと考えられる。

以上からも分かるように、英語を学ぶことによって、日本語にも良い影響を及ぼすことが考えられます。学者によっては、日本語と英語とでは、数多くある言語の中でも、成り立ちや造りなどにおいて、最も遠い距離にある言語であると主張する人もいます。つまり、全く異なる言語同士なので、日本語を母語にする人にとっては、英語をマスターすることほど容易なことはないということです。この点は頷けるところかもしれません。しかし、たとえ大きく異なる言語だとしても、同じ人間が使うものである以上、様々な共通点や異なる点に注目することによって、母語である日本語の成り立ちや造り、文法などにおいても、今まで意識しなかった点に気付いたり、新しく知識として知り得たりすることはよくあることです。我々は日本語でものごとを考えます。その日本語がおぼつかないようでは、英語以前の問題として、生きる力を身につけることはできません。その意味でも、日本語を豊かにするためにも、言葉に対する意識を高めるためにも、そして、考える力を向上させるためにも、外国語としての英語を学ぶことは価値のあることなのです。

(2) 避けては通れないグローバル化(生きていくため)

楽天やユニクロなどで、外国人の採用を増やしているとのニュースを耳にします。また、大手の企業では会議を英語で行っているという話もよく聞きます。また、インドネシア人が看護師として日本で働いているという話も耳にします。一方、日本企業が海外進出し、日本人の従業員が海外に移住した

という話も出てきました。このようなグローバル化はもう止めようがありません。日本国外にとどまらず、国内においても、英語が求められ始めたのです。つまり、英語は生きていくための必要十分条件となり始めたのです。教育の面においても、アジアの国で英語を必修化していないのはインドネシアだけとなりました。また、日本の幼稚園・保育園の60%以上では英語を学ぶことができるようになってきました。私は「これからの子どもたちにとって、幸せになる条件は、英語とコンピュータをマスターすることである」と公言しています。つまり、英語ができると職種も広がり、職場も世界に広がります。しかも、給与の面においても高収入が期待できます。ただし、コンピュータは友だちに教わったり、自分なりに技術を向上させたりすることができますが、英語に至っては、独学というわけにはいきません。学校での英語の授業が重要になってきます。この点を肝に銘じて、日々の授業に取り組むことが大切なのです。これは、将来の幸せをつかむための入り口と考えるべきでしょう。

(3) 異なる人と文化を知る（楽しむため）

海外旅行はたいいていの場合、楽しい思い出として記憶に残るものです。その楽しい思い出とは、多くの場合、異文化をもった人々との心温まる交流や様々な異文化体験が主たるもののようです。もちろん、これは、海外旅行ばかりではありません。日本国内を含め、地球の至る所で経験できることです。しかし、この体験をより意味のあるものにするには、ツールとなる言葉が最も重要になります。「言葉が分かったら、もっと楽しかったろうに」と後悔している人の話をよく耳にします。そうです。同じ費用でも、得た情報や感動ははるかに異なるのです。後悔しないためにも、そして、人生を楽しむためにも、まず英語を手に入れましょう。

おわりに

英語を入試のためのものと思うことほど価値のないものはありません。英語は自分を磨くもの、そして、自分を美しくしてくれるものとして、生涯教育として楽しく学ぶことがポイントなのです。